
東京2020で変わったオリンピック・モットー

～近代五輪史の節目と新たな理念～

The Change in the Olympic Motto Effective as of the 2020 Tokyo Games

A Milestone in Modern Olympic History and Broadening of the Olympic Concept

脇田 泰子

1) オリンピック・モットーの変更

新型コロナウイルス感染症の世界的なまん延により、東京2020オリンピック・パラリンピック競技大会（以下、東京2020と記す）の史上初の一年延期が決まった2020年、雑学的なクイズをオンラインで毎日出題するサイト、「クイズプラス」の10月11日付を見ると、「オリンピックのモットーは『より速く、より高く、より何』か？（より厳しく、より美しく、より静かに、より強く）（ ）の中から、答えを選んでください。」というクイズが出されている¹⁾。正解は「より強く」で、知る人にとってはたわいもない問いなのだが、知らずに答えを当てにいこうとすると、新体操やフィギュアスケートなどのイメージから、「より美しく」を選ぶ人も昨今では少なくないかもしれない。このクイズが出された時点では、作問者も含め、モットーが翌年変わるうとは誰一人として想像もしていなかっただろう。オリンピック憲章にも記される「より速く、より高く、より強く」

²⁾の変更については、オリンピックを主催する国際オリンピック委員会（以下、IOCと記す）会長として1期目の任期を終えようとするトマス・バッハ会長（Thomas Bach 1953-）が、2021年3月のIOC理事会で再選が決まった際に、遠隔で行われたIOC委員向け受諾演説で、以下のように初めて正式に提案したものである。

「コロナ禍後の世界で皆さんと一緒に大きな目標を達成していきたい」「今回のコロナ禍で、『より速く、より高く、より強く』というオリンピックのスローガンをスポーツと人生でかなえていくには、皆が協力し合わなければならないということ私たちが身をもって学んだ」「そのため、今日は皆さんに聞きたい。このスローガンを補足するために後ろにハイフンと『ともに』の一言を加えて『より速く、より高く、より強く—ともに』とするべきではないかと」「こうすることで、私たちのコアバリューである連帯、そしてこの新しい世界の課題への正しい適応に、しっかりコミットできるようになるだろう³⁾」

つまり、これはコロナ禍という未曾有の危機下で、それでもなお東京2020を開催しないとする

選択肢を断固として取らない、そのためには逆に、選手と観客との一体感のある関係性の中でこそ成立するスポーツの大前提の方を潰すことも厭わず、したがって、そのことにより生じるこの困難な時を「ともに」乗り越える際に不可欠な団結力をどうしても共有しなければならないがため、これまでのモットーに「ともに」の一言を付け加えようとする発想に至ったのだということになる。コロナと闘う世界に向けてスポーツを通して連帯を呼びかける目的を明確にするため、とIOCは優等生的に準備された御託を理由として並べるが、それならば、なぜ、コロナの脅威にさらされてまでオリンピックを開催しなければならないのか、この素朴な疑問を解き明かすことなく棚上げにしたままである以上、疑問を抱く人から見れば、それこそ「ともに」どころではない話である。

このバツハの魂胆を見透かすかのように、東京の次、2024年パリ・オリンピックの開催国、フランスの主要紙ル・モンドは、開会式の翌7月24日付の社説で、「(日本)国民の総意に反するという不信感、無観客開催により、東京オリンピックは始まる前から台無しだが、いったん始まると、オリンピックならではの格別なパフォーマンスや感動のシーンの舞台となるはず」と先に指摘したうえで、「クーベルタンのかの有名なモットー『より速く、より高く、より強く』は先ごろ『ともに』を追加する近代化が図られたが、このことにより、モットーは『より高価で、より疑義があり、より政治的』に変質した⁴⁾と断じた。モットー変更者のまたの名が、今回の開催断行騒動を通じて「ぼったくり男爵」⁵⁾となったことも想起される。

2) オリンピック・モットーの なれそめと歩み

そもそも、モットーとは英語の motto から来た言葉だが、元はイタリア語⁶⁾で、「(西洋の封建貴族が楯・紋章などに記した題銘) 行動の目標や指

針とする標語、格言。座右の銘。」⁷⁾の意である。オリンピックには、全体のモットーとは別に、近年⁸⁾、夏冬とも各大会固有のキャッチフレーズ的なものも存在する。たとえば東京2020では、「United by Emotion (感動で私たちは一つになる)」⁹⁾ だったし、2022年北京冬季オリンピックのそれは「Together for a Shared Future (未来に向かって一緒に)」と発表された¹⁰⁾。IOCサイトの日本語版は両者とも「モットー」あるいは「スローガン」と訳しているが、日本オリンピック委員会(以下、JOCと記す)によるオリンピック憲章の日本語訳では、前者を「オリンピック・モットー」と表記していることから、本論でもこちらを「オリンピック・モットー」(以下、モットーと記す)、後者を「大会モットー」と書き分けることとする。

会長選では対立候補がなく、バツハ会長は信任投票により有効投票94票中、賛成93票、反対1票で再選された。その彼が2025年までの新たな任期の目玉として掲げた提案に対して、さらに反対を唱える者など出てこようはずがない。コロナ・パンデミックの中、史上初の無観客開催が決まったオリンピックの憂鬱な開幕を3日後に控えた2021年7月20日、東京で開かれた第138次IOC総会では、「より速く、より高く、より強く」という従来のモットーにハイフンを付け、「ともに(Togetherあるいはラテン語でCommuniter)」を加えて変更することが正式に承認されたのである¹¹⁾。英語では、Faster, Higher, Stronger-Togetherとなる。

オリンピックという国際的な一大スポーツイベントに、モットーそのものを出現させたのは1894年、主催団体IOCを設立した近代オリンピックの父、ピエール・ド・クーベルタン男爵(Pierre de Frédy, baron de Coubertin, 1863-1937)がそのように提案したからである。原文をCitius Altius Fortiusというこのラテン語の表現は、ただし、彼が自分で考案したものではない。1871年に普仏戦争に敗れると、フランス人の中には報復を求

める声とともに、その後、祖国愛と国家再建への強い思いが湧き起こっていた時代である。また同時に、イギリスを訪れ、学生がスポーツに打ち込む素晴らしさに感銘を受けたクーベルタンは、そのような自国を教育面から改革するにはスポーツの採用が鍵になると確信し¹²⁾、パリ近郊アルクイユのアルベール・ル・グラン (le collège Albert Le Grand d'Arcueil) という高校の校長で、自らが敬愛するアンリ・ディドン神父 (Henri Didon 1840-1900) に、周辺校同士の生徒の交流を目的とした陸上競技大会¹³⁾の企画を依頼した。1891年3月7日、クーベルタンの肝いりで開催に至った大会で、ディドン校長が生徒たちに贈った言葉がこのCitius Altius Fortiusだったのである。その場で聞いていたクーベルタンは、3年後の6月23日¹⁴⁾、IOC創設にこぎつけた際に、その表現をそっくりそのまま譲り受けることにしていた¹⁵⁾。つまり「より速く、より高く、より強く」は、もともと陸上競技を対象にディドンによって編み出された言葉だったのである。

IOCの誕生と同時に導入されたモットーは1914年、すなわちIOC創設20年を記念してパリで開催されたオリンピック・コンGRESS¹⁶⁾の期間中、ソルボンヌ大学の講堂で行われた第17次IOC総会で、206cm×60cmの白地の布に青・黄・黒・緑・赤の5つの輪をW字型に描いた旗がオリンピック旗として承認、制定された際にも、その旗の下に月桂樹の葉とともに飾られていた。それ以前の当初の旗にはモットーが縫い込んであった¹⁷⁾。コンGRESSに参加した人々には、クーベルタンがパリの百貨店、ボンマルシェに注文して作らせた500本の五輪の小旗が配られる形で公表された。それに先行し、クーベルタンがオリンピック旗の案について初めて発表したのは、前年の1913年8月発行の「オリンピック・レビュー」誌上においてだが、その号の冒頭部分の奥付にもCitius Altius Fortiusのモットーが、月桂樹の葉とフェンシングの剣とともに描かれたモチーフとなって印

刷されている¹⁸⁾。

このように、モットーは近代オリンピックと共に歩みをともしてきた。オリンピック旗は本来、IOC承認の2年後、1916年オリンピックの開催地、ベルリンで初登場するはずだったが、それが実現しなかったのは、そのドイツと連合国との間に1914年、第一次世界大戦が勃発したからである¹⁹⁾。近代オリンピックも、古代のそれと同様、戦争による中止を余儀なくされることとなった。フランスはドイツの侵攻を受け、安全な地ではなくなった。IOC本部は当初、クーベルタンのパリの自宅にあったのだが、彼は1915年、五輪旗を携えて戦禍のパリから永世中立国のスイスに向かった。旗とともにIOC本部をローザンヌ市役所内に置いたのは4月10日であった²⁰⁾。ローザンヌはレマン湖の北に広がる高級保養地でフランス語圏ということもあるが、彼が最も信頼を置く同僚で、1889年来スイス初のIOC委員を務めるゴドフロワ・ド・プロネ (Godefroy de Belonay 1869-1937) の勧めによるものであった。IOC移転の2年前には、この町でスポーツ心理学と生理学に関する1913年オリンピック・コンGRESSも初開催している。当時のスイス連邦大統領、ジウゼッペ・モッタ (Giuseppe Motta 1871-1940) もクーベルタン宛の電報で、「スイスという中立かつ平和な地への皆様のご来行を歓迎します」と述べるなど、その後、“五輪の総本山”としての地位を獲得していくスイス側とクーベルタンとの間のやり取りは、プロネの仲介もあり、当初から非常にスムーズに運んだ²¹⁾。1916年、53歳のクーベルタンはフランス陸軍に志願するため²²⁾、ローザンヌをいったん離れる決断をした。同時に、軍人にスポーツは任せられないからとして自らIOC会長を辞し、その間の代理としてプロネを信任したのである。

オリンピック旗が初めて会場に翻ったのは、戦後の1920年アントワープ・オリンピックの時だ。この時、世界は戦争直後だった上、スペイン風邪

の大流行で、ベルギーもパンデミックに見舞われ、苦しんでいた。そして、不死鳥の奇跡のようにオリンピックは戦争と疫病の二つの災禍を乗り越えたと語り継がれている。しかし、モットーがオリンピック・モットーとして正式採用されるに至ったのはその4年後、クーベルタンがIOC会長を退く前年の1924年パリ・オリンピックにおいてであった。さらにその2年後、リスボンで開かれた第25次IOC総会でオリンピック憲章が制定され、モットーは確認した限りにおいては、その1933年版で初めて記されることとなった²³⁾。したがってパリが2024年、第2回1900年パリ・オリンピック以来3度目のオリンピックを丸100年ぶりに迎える時には、モットーも正式な形でオリンピックにデビューして百歳を数えることとなる。

3) モットー変更とその意義を伝える時

今となってはこの1世紀に及ぶ歴史と、したがってそれだけの伝統を育んだモットーが、コロナ禍下の、しかもオリンピックの故郷から遠く離れた極東の地で初めて変更されることとなった。この事実は、それ相応の重みを持って受け止められてもよかったはずだが、開催都市の地元、日本では、これを報じるメディアと、そうでないところとのばらつきがあった。さらに、先述のバッハ会長再選時にモットーの変更提案が成されたことについても、それを伝える日本の新聞メディアとして確認されたのは、読売、産経、毎日であった²⁴⁾。その一方で、欧州メディアは軒並みこの3月のバッハ再選時に、モットー変更についても合わせて大きなニュースとして取り上げていた。変更が正式承認された7月のIOC総会の時点では、アメリカ・メディアを含め、内容の要点も改めてしっかり抑えられていたが、日本では、まだ変更気づいていないのではと思われる記事も見受けられた。もっとも、メディアに限らず、JOCのサ

イトでさえ、変更から半年が経過した2022年1月現在も、『『より速く (Citius)、より高く (Altius)、より強く (Fortius)』というオリンピックのモットーは、オリンピック・ムーブメントに所属するすべての者へのIOCからのメッセージであり、オリンピック精神に基いて研鑽することを呼びかけたものである。』という変更以前の文章そのままとなっている²⁵⁾。これは、東京オリンピック閉幕時の2021年8月8日施行となった現行・最新のオリンピック憲章 (仏・英語版) の日本語版がこの時点では未掲載という事情による部分があるかもしれない。確かに、憲章全体の訳出や確認には時間を要するだろう。それでも、変更などの事実があるならば、そのことだけでも先に伝えることが、情報性、信頼性という点から随時更新可能なインターネット・サイトにも求められるべき姿勢だと考えられる。

国内外でモットーに関する報道にこのような温度差が生じるのは、近代オリンピックを歴史にどのように位置付け、また、今を生きる同時代人としてどのようにこれを受け止めるか、という社会全体の認識のあり方に根本的な違いがあるからではないか。たとえば、夜8時に始まった東京オリンピック閉会式で次回開催都市パリへの引き継ぎ式の直後、テレビの画面は突如、昼間のパリからの生中継映像に切り替わった。エッフェル塔の最上階では、若者に囲まれたマクロン大統領がこの新しいモットーをフランス語で一語ずつ、ゆっくりと語り掛けた。「Plus Vite, Plus Haut, Plus Fort-Ensemble (より速く、より高く、より強く―ともに)」つまり、今回の引き継ぎ式は、従来のオリンピックのように閉会式会場でオリンピック旗が受け渡されるにとどまらず、初めて次の開催都市でも同時に行事が進行するようになった。加えて、その中で新しく変更されたモットーが、国家元首、しかも、クーベルタンの祖国の大統領によって唱えられるという、誠に手の込んだ演出を通じて全世界に披露されたのである。このシーンを伝

える日本の新聞には、「より速く、より高く、より強く」と書かれたものがあれば、また、同一新聞社の記事であっても、モットーに関する言及の際に、書き手によって「ともに」を加えた内容と、そうでないものが混在している事例もあった。

だからといって、これは書いた、書かないの次元で論じて何かが明らかになるような話ではない。別の人が作った古典語によるフレーズを、いわば焼き直すような形を取ってでもモットーとして採用し、高らかに謳うことにより、その理念を社会の隅々にまで浸透させようと、オリンピックにこだわり続けた人物が確かに存在した。そのこと自体が神話の始まりのようだが、加えてこれが、戦争による中断こそあれ、1世紀以上続いていくうちに、生みの親さえ想像できないほど肥大化し、かつ、それ以上に大きなパンデミックという災厄に見舞われていてなお中止しない、できないというのではないか。それどころか、それは「ともに」乗り越えていくもののだとして、逆に新しいモットーまで動員してくるご時世となったのだ。そのような近代オリンピックの正体とはいったい何なのか。この疑問は、祭りの後に残された莫大な経費のツケとともに、東京2020を目の当たりにした日本人の前になお立ちはだかったままである。オリンピックが単なる運動会、ましてや、政治家の食い物などではないとするならば、スポーツの祭典を尊重する状況が社会全体で整っているといえるか。それゆえに、どれだけ費用がかかろうとも、開催権を懸けた招致レースに手を挙げ、必勝モードで臨むことになるのか。もし、そうであるならば、そこには真っ先に人が生きる喜びを感じることのできるスポーツそのものへの親しみがあり、そのうえでオリンピックに対する社会の共通認識が醸成されていくことは必然といえる。また、そのような社会作りを目指す為政者レベルで、心躍るスポーツの集合体としてのオリンピック開催よりも、これを機に生じる大規模なインフラ整備や再開発といった新たな街づくりがもたらすメ

リットや権益の方に目が向いているうちは、身を動かすスポーツのダイレクトな楽しみ方を望む人たちのための成熟した社会は一向に到来せず、したがって、オリンピックの目的や理念も一層、見出されにくくなると考えられる。スポーツを通じて、友情、連帯、フェアプレーの精神を培い、互いに理解し合うことにより、世界の人々が手をつなぎ、世界平和を目指す運動としてのオリンピック・ムーブメントを通じて、我々がよりよい社会作りへの貢献を明確に目指しているかどうか。このことについて胸に手を置いて考えることをよしとする価値観が、過度の違和感なく根付いているかどうか。このような視点を社会全体がどこまで自然な形で持ち得ているのか。ジャーナリズムがその国の社会の民度を表すものであり、さらに、課題に応じた今後の指針を社会に向けて主張し、示していく論評活動がその大きな使命の一つであることを思い起こすならば、オリンピックについても良質で多彩な情報を集めて分析し、その意味や見方を提示して価値を評価するとともに、今後の道しるべとなる意見や方向性を指し示すという点で、日本のメディアが果たすべき役割は、まだまだ少なくはないはずだと考える。

4) 時宜は得ているものの、払拭し切れぬ疑念

2021年7月時点で、モットーに新しく追加されることが決まった部分のラテン語 (Communitar) について、イタリアの公立ローマ第3大学人文学部のラテン語文学研究者、マリオ・デ・ノンノ教授 (Professore Mario de Nonno) が地元紙の取材に対して、この単語は何かを「共有」する状態を指すのであり、「ともに」のニュアンスはないため、意味を成していない、「ばかげている」と指摘した²⁶⁾。その発言を受け、また別の記事は、「東京2020後の夏休みの宿題としてIOCはこの部分の再考を要することとなった。しかし、これは単に

人間の間違いというよりは、今ごろになってモットーを変えるIOCの不徳の致すところ²⁷⁾である。」と締め括った²⁸⁾。なぜ不徳なのか。それは、3月にモットーの変更・追加構想をバッハ会長が最初におち上げた際に披露されたラテン語の単語(Communis)について、「文法的におかしい」と専門家から横やりが入り、その後修正されて出てきたものが7月のCommuniterだったからである。つまり今回、これに再びクレームが付いたわけで、コロナをものともしないIOCではあるが、古典語としてのラテン語の素養を持ち合わせる人材さえ見当たらないのでは、との疑念が深まりもした。それでも、IOCはこの2度目のラテン語提案について、「夏休みの宿題」にする間もなく、世界に名だたる顕学の指摘を早々に袖にする形でCommuniterを最新版のオリンピック憲章に掲載し、モットーとして採用した(注11)参照)。とにかく正式決定した以上、それこそ、より早く、との意を汲んでか、ラテン語の故郷、イタリアからその後、水を差す動きは伝わってこない。

「より速く、より高く、より強く」が本来、人との比較ではなく、自分自身が日々向上することを意味する²⁹⁾のだとすると、そこにわざわざ「ともに」と付けずとも、一人ひとりの向上が自然に全体の向上につながっていくので不要という解釈も成り立つ。さらに、スポーツ専門チャンネル・ユーロスポーツは、今回の変更がほぼ1世紀にわたり生きてきたモットーに初めて変化が加わる事実であり、オリンピック憲章(第1章オリンピック・ムーブメント第10条オリンピック・モットー)の書き換え作業も伴うことから、これは明らかに近代五輪史における大きな節目、いや分断ともなる出来事だとする分析を掲げている³⁰⁾。せつかく「ともに」として、IOCが連帯や団結を強調しようと意図しているにもかかわらず、分断などというやや不穏なイメージの表現をせざるを得ないという評価である。

単に一語の追加だとはいえ、そこまでの意味を

成すモットーの変更だとするならば、もう一つ、知りたいことがある。IOCは東京オリンピックの約1カ月前、6月23日のオリンピックデーの前日から、全世界向けにキャンペーンを始めた。その名は「より強く、ともに」で、新しいモットーの後半の単語2つだけを独立させたものなのだが、キャンペーンの日本語は、なぜか「団結すれば強くなる」である。もはや同時につけたはずのハイフンは消えたも同然の扱いとなり、モットーとはまったく別のメッセージが展開され、さらにIOCも新型コロナウイルスとの闘いに直面する中で、世界中の人々に希望、団結、インスピレーションをもたらすアスリートの強さ、回復力、決断を祝うものだと説明する³¹⁾。しかも、そこにはモットーに関する言及は何一つない。世界最速プリンターのウサイン・ボルトや、女子テニスの大坂なおみらがそれぞれ1分ほどのキャンペーン動画に登場し、大坂は「見ている女の子たちに勇気を与えたい」として、「人々の思う基準から外れているのはよいこと。それを変えることが私たちにはできるから」と世界中の少女にエールを送っている。当時の大坂は、5月にテニスの4大会の1つ、全仏オープンを途中棄権し、2018年以来、うつに苦しんでいたことを告白した。東京オリンピックでは開会式で最終聖火ランナーとして地元日本や世界を驚かせつつ、その役割を務め上げ、オリンピックのコートにも復帰した。それはそれで素晴らしいことだが、そのこととは別に、そもそもモットーとは、レゴブロックのように一つずつばらしては、別のもつと組み合わせるようなことがそう簡単にできる代物なのか。

さらに、英語のStronger Togetherは、実は2016年に出版された書籍のタイトルでもある。こちらは、同年のアメリカ大統領選挙に立候補したヒラリー・クリントン(Hillary Diane Rodham Clinton, 1947-)女史が、副大統領候補としたティム・ケイン(Timothy Michael "Tim" Kaine, 1958-)連邦上院議員とともに著したもので³²⁾、これこそ

は「より強く、ともに」選挙を戦おうという意味で分かりやすい。それと同じ趣旨で、コロナウイルスと「より強く、ともに」闘うことをIOCも考えるのだとしても、本来、ここにはもともと「より速く、より高く」の前段があるため、そうはたやすく分離できないはずである。そもそも、解体して何かを生み出す、その創造の過程の価値は決して否定されるものではないが、本来、モットーとは斯くも安直にバラバラにしてよい程度の軽いノリのものであったのかと、単に時代の変化として片づけるだけでは済まされない、ある種のうさん臭さにも似た疑念をどうしても払拭し切れない。

逆に、忠実ならばよいというわけでもなからうが、それならば、三波春夫の「東京五輪音頭」と並ぶ、前回1964年東京オリンピックの前年に作られた東京五輪愛唱歌「海を越えて友来たれ」³³⁾の1番の歌詞は、まさに以下の通りである。

1. 海を越えて 友よ来たれ

明け渡る 山に川に

若さ溢れ 力溢れ

より速く より高く より強く

大地蹴る 響き高く

ああ 東京 東京オリンピック

しかも、1番でこのように登場するモットーは、2番、3番でも同様に歌われる念の入れようである。これほどの愚直な誠実さを做う必要はないが、クーベルタンやディドンがこの歌を聞いたら、涙を流して喜んだことだろう。

それから半世紀以上が経ち、日本でも、「コロナ禍に打ち克った証」、「安心・安全な五輪」という空疎な文言だけが呪文のように繰り返され、誰一人その具体的な内容も分からぬまま、発信した当事者のみが、閉幕も待たずに退陣の意向を示さざるを得なくなった。バッハはこれに対して、「コロナ禍であっても、人はともに連帯、団結していける」という図を描いてみせた。つまり、モットーに追加された「ともに」の示す内容が、この先に向かって歩み続けるために必要な新しい理念であ

り、ビジョンとなる、と標ぼうしたのである。

開会式の際に非難されたほどの長尺ではなかったが、バッハ会長は、その約半分の7分程の演説を閉会式でも行った。「我々はより速くいくほかありません、より高く目指すほかありません、より強くなるほかありません。連帯して、ともに立つならば。これが、IOCが、オリンピックの標語を私たちの時代に適応させた理由です。より速く、より高く、より強く、ともに。この一体感は、すなわち、パンデミックの暗いトンネルの終わりにある光です。」

オリンピック・モットーが正式に採択されて百年近くが経ち、それが追加・変更されて初めて実現した東京2020だからこそ読み取れるメッセージがここにはあるらしい。日本の総理の記者会見ではないが、パンデミックの終わりの光が依然として見出し得ない状況下でたとえあったとしても…。紛れもなくアスリートの素晴らしいパフォーマンスと心意気に励まされ、長かった2021年夏の東京オリンピック・パラリンピックは、国立競技場のLEDビジョンに映し出されたARIGATOとともに漸くゴールを果たした。無観客による無事開催のまま、困難を越えて。このような時だからこそ、1世紀以上の近代五輪史の観点も交え、人類の危機をともに乗り越えることの意味を把握し直してみるような伝え方が、スポーツ・ジャーナリズムにも少しばかりはあってもよいのではないかと考えられる。さらに、本論で考証を加えたモットーがどのような意図で作り出されたのか。このことについて、五輪史を明らかにする考証をなお積み重ねることにより、引き続きその実態を明らかにしたいと考えている。

注

1) <https://quiz-chishiki.com/blog-entry-30242.html> (最終閲覧日2021年9月13日)

2) 日本オリンピック委員会 (JOC) 「オリンピック憲章2019年版・英和対訳」p. 21 第1章10: オリンピックのモットーである「より速く、より高く、より強く (Citius-

- Altius-Fortius) は、オリンピック・ムーブメントの大志を表現している。https://www.joc.or.jp/olympism/charter/pdf/olympiccharter2019.pdf(最終閲覧日2021年9月13日)
- 3) IOC https://olympics.com/ja/news/thomas-bach-re-elected-ioc-president-for-additional-four-years (日本語版・最終閲覧日2021年9月15日)
- 4) ル・モンド紙 2021年7月24日付 https://www.lemonde.fr/idees/article/2021/07/24/apres-tokyo-greenchanter-les-jeux-olympiques_6089409_3232.html (最終閲覧日2021年9月7日)
- 5) スポーツ・コラムニストのサリー・ジェンキンス記者が、アメリカのワシントン・ポスト紙2021年5月5日付コラムを通じて、バッハIOC会長に Von Ripper-off 「ぼったくり男爵」のニックネームを付すとともに、「(コロナの)世界的大流行の中で国際的な大規模イベントを主催することは不合理な決定」だとして、開催国を食い物にする悪癖があるIOCに対して、日本は五輪中止で「損切り」すべきだと提言した。
- 6) さらにその語源をたどるとラテン語の muttum で「声、発声」といった意味がある。それがイタリア語として伝わり「motto」となった。
- 7) 新村出編『広辞苑 第七版』p. 2912、岩波書店、2018年
- 8) 対外的にも発信される大会モットーが定期的に採用されるようになったのは「調和と前進」「世界はソウルへ、ソウルは世界へ」で知られる1988年ソウル・オリンピックから。因みに1964年東京オリンピックの「首都美化はオリンピックの一種目」は対外的メッセージというより、海外からの訪問客を迎え入れるため自国民向けに唱えられたもてなしのモラルのようなものだった。
- 9) 公益財団法人東京オリンピック・パラリンピック競技大会組織委員会サイト https://www.tokyo2020.jp/ja/games/vision-motto/index.html (最終閲覧日2021年9月20日)
- 10) IOC https://olympics.com/ja/news/beijing-2022-reveals-official-motto-together-for-a-shared-future (最終閲覧日2021年9月20日) 中国語では「一起向未来」。
- 11) IOCオリンピック憲章2021年8月8日施行版(フランス語版) p. 21 第1章第10条 https://stillmed.olympics.com/media/Document%20Library/OlympicOrg/General/FR-Olympic-Charter.pdf
IOCオリンピック憲章2021年8月8日施行版(英語版) p. 20 第1章第10条 https://stillmed.olympics.com/media/Document%20Library/OlympicOrg/General/EN-Olympic-Charter.pdf (最終閲覧日2022年1月3日)
- 12) 「クベルタン自身は教育的なものの方向に向って自ら動いていった。それは偏狭な国家主義とは遥かに遠いとはいえ、しかしながら国家観念に根ざしたものであった。彼は新しい教育、すなわちスポーツ的訓練によって人間に生きる力を与えようと願ったのである：とりも直さず主知主義の教育が危険を生むと思われたので「祖国に新しい力をもたらす」rebronzer la France ために、スポーツを採用すべきだと唱えたのである。」カール・ティーム編、大島鎌吉訳『ピエール ドクベルタン オリンピックの回想』p. 10、ベースボール・マガジン社、1976年
- 13) フランスの代表的百科事典 Encyclopédie Universalis https://www.universalis.fr/encyclopedie/sport-disciplines-l-athletisme/ (最終閲覧日2021年9月10日)
- 14) オリンピックの復興とその主催者たるIOC創設が決まった6月23日はオリンピックデーと呼ばれる。
- 15) Ronald Hubscher 編著 L'Histoire, numéro 209, 1997年, pp. 66-71 Alain Morinain 著 Athlètes et gymnastes de la Belle Epoque
- 16) Olympic Congress IOCや各国国際競技連盟、各国オリンピック委員会などが一堂に会し、オリンピックの将来を検討する全体会議のこと。
- 17) フランスオリンピック委員会(CNOSF)五輪マークと五輪旗の説明 https://cnosf.franceolympique.com/cnosf/actus/4929-les-anneaux-et-le-drapeau-olympique.html (最終閲覧日2021年9月2日)
- 18) IOCの組織の一つで、オリンピックに関する世界的な情報源であるオリンピック研究センター(Olympic Studies Centre)のオリンピックワールドライブラリー所蔵 https://library.olympics.com/ui/plugin/common/pdfs-.9.359/web/viewer.html?file=%2Fdefault%2FdigitalCollection%2FDigitalCollectionInlineDownloadHandler.ashx%3FparentDocumentId%3D169704%26documentId%3D169705%26_cb%3D20211216065709#page=4&zom=110,262,547 (最終閲覧日2021年9月5日)
- IOC 1913年初の五輪旗の登場 https://olympics.com/cio/1913-premiere-presentation-publique-du-symbole-des-cinq-anneaux (最終閲覧日2021年9月5日)
- 19) 1914年オリンピック・コンGRESが6月15～23日に開催された。第一次世界大戦は、オーストリア領サラエボでオーストリア＝ハンガリー帝国の皇太子がセルビア人の民族主義者に暗殺されたのを機に、オーストリア＝ハンガリーがセルビアに対して宣戦布告を行った7月28日に始まり、8月3日にはドイツがフランスに宣戦布告する形で、ヨーロッパの東部から西部へと戦線が拡大することとなった。
- 20) IOC「なぜローザンヌ」https://olympics.com/cio/pierre-de-coubertin/pourquoi-lausanne (最終閲覧日2021年9月14日)
スイス・ローザンヌ市役所「ローザンヌはオリンピックの首都」https://www.lausanne.ch/portrait/capitale-olympique/siege-du-cio/pierre-de-coubertin/hotel-de-ville.html (最終閲覧日2021年9月10日)
- 21) オリンピック研究センター・オリンピックワールドライブラリー所蔵IOCニューズレター1915年第2号 Bulletin Du Comité International Olympique Vol. 2, 1915より https://library.olympics.com/ui/plugin/common/pdfs-2.9.359/web/viewer.html?file=%2Fdefault%2FdigitalCollection%2FDigitalCollectionInlineDownloadHandler.ashx%3FparentDocumentId%3D169727%26documentId%3D169728%26_cb%3D20220106112618#page=2&zom=90,-32,814 (最終閲覧日2021年9月15日)
- 22) 陸軍士官学校卒の男爵クーベルタンは1896年、第1回近代オリンピックがアテネで開催された直後からIOC会長を務め、フランス陸軍で第一次世界大戦終戦時まで行政職に就き、終戦後、会長に復帰して1925年に退いた。
- 23) 1933年オリンピック憲章(IOCと近代オリンピック・フランス語版) p. 13 https://library.olympics.com/

- Default/doc/SYRACUSE/62036/le-comite-international-olympique-et-les-jeux-olympiques-modernes-comite-international-olympique
同(英語版) p. 13 <https://library.olympics.com/Default/doc/SYRACUSE/62045/the-international-olympic-committee-and-the-modern-olympic-games-international-olympic-committee>
- 24) 脇田泰子「東京2020—オリンピックの挽歌」五輪報道のうちそと、p. 70、創文企画、2021
- 25) JOCオリンピック憲章14.オリンピックのモットー
https://www.joc.or.jp/olympism/charter/chapter1/13_17.html (最終閲覧日2022年1月10日)
- 26) イタリアの政治分析専門日刊紙ラパルラメント2021年7月22日付独占記事「IOC、オリンピック・モットーのラテン語を間違える」<https://www.labparlamento.it/esclusiva-lab-il-cio-sbaglia-la-citazione-in-latino-sul-motto-olimpico/>
- 27) Mea culpa ラテン語で「私の罪」の意。祈りの言葉で「我が過ちによりて」
- 28) フランスの公共放送フランス・テレヴィジオン (France Télévisions) のニュースサイト Franceinfo 2021年7月25日付「新しいモットーでIOCはラテン語を見落とし」https://www.francetvinfo.fr/les-jeux-olympiques/tokyo-2021-avec-la-nouvelle-devise-olympique-le-cio-en-perdson-latin_4715445.html
- 29) 笹川財団2017年度第8回スポーツアカデミー「オリンピックの理念とオリンピック・ムーブメントの展開」<https://www.ssf.or.jp/dotank/academy/2017/08.html> (最終閲覧日2021年9月10日)
- 30) ユーロスポーツ2021年7月20日付 https://www.eurosport.fr/jeux-olympiques/tokyo-2020/2020/jeux-olympiques-tokyo-2020-plus-vite-plus-haut-plus-fort-ensemble-le-cio-change-la-devise-olympique_sto8426515/story.shtml (最終閲覧日2021年9月3日)
- 31) IOC <https://olympics.com/ioc/news/ioc-launches-strongertogether-campaign-that-celebrates-olympic-heroes-and-delivers-a-message-of-hope-and-solidarity-on-olympic-day>
- 32) Hillary Clinton and Tim Kaine, Stronger Together: A Blueprint for America's Future, 2016, Simon & Schuster
- 33) 作詞：土井一郎、作曲：飯田三郎、編曲：富田勲1963年(昭和38年)
また、2020年夏季オリンピック東京招致の一環で2013年3月、現地調査のため来日したIOC評価委員会メンバーの歓迎行事の際に、安倍晋三首相(当時)がスピーチの途中で熱唱したことでも知られる。

わきた・やすこ / 文化情報学部教授
E-mail : wakita@sugiyama-u.ac.jp

